

---

# 東方零物語

A G I T

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方零物語

### 【Zコード】

N8041Z

### 【作者名】

AGIT

### 【あらすじ】

ベリアル銀河帝国との戦いから一年が経ちビートスター事件を解決し新たにジャンナインを仲間に加えたウルトラマンゼロ率いるウルティメイトフォースゼロ。

アナザースペースに戻り父であるウルトラセブン、ウルトラマン、ゾフィーの言葉に不安を抱き、注意しながらパトロールしているとベリアル軍の残党レギオノイドと遭遇し残ったレギオノイド達はかつて、惑星チェイニーで戦い、倒したはずのダークロープスゼロが別の宇宙へ飛ばしてしまい自らも姿を消した。

戦いが終わり仲間と合流しようとしたゼロは声を聞いた、助けを求める、そしてジャンナインと共にその声を頼りにウルティメイトマイクを使い別の宇宙へ旅立つのだった。

## STAGE 01 プロローグ（前書き）

今回はゼロの幻想入りです、ジャンナインも着いていますが後々合流予定です。

タイトルはゼロサークガという感じで、ウルトラマンサークガまでの時系列ではなく被せた時系列ですので……チームUは東方キャラ達的な感じでやれたらいいなと思っています。  
長い前振りもここまでにして始めたいと。

登場怪獣

帝国機兵レギオノイド

ダークロープスゼロ

登場

## STAGE 01 プロローグ

ここは我々が住む宇宙とは別の宇宙、アナザースペースである。この宇宙はかつて悪のウルトラマンであつたカイザーベリアル率いるベリアル銀河帝国が蹂躪していたのだが若きウルトラ戦士、誰よりも、地球人より地球人を愛した男、ウルトラセブンの息子であるウルトラマンゼロとその仲間達がカイザーベリアルとその銀河帝国を倒しアナザースペースにはびこる悪を倒すべくゼロは共に戦つた、グレンファイヤー、ミラーナイト、ジャンボットを仲間にしウルティメイトフォースゼロを結成し平和を守るために戦つっていた

……

ベリアル銀河帝国の戦いから一年が過ぎ、そして巨大な天球、そのメインコンピュータであるビートスターとゼロが元にいた宇宙で戦い、勝利し新たな仲間、ジャンナインを加えアナザースペースに帰つて再びウルティメイトフォースゼロとしての活動を続けていた。

「ここいらは異常ないみたいだな」

額に緑色に輝く丸いランプに、頭部に一本のブーメラン、細長い三角を下に向けたような黄色く輝く一つの眼に胸の真ん中に輝く青いクリスタル、

それを中心に肩にも装着されたプロテクター、上半身は青く下半身は赤く銀と青のラインが流れ左腕に銀色で青いクリスタルが埋め込まれたウルティメイトブレスレットを嵌めたこの巨人こそがウルト

「マンゼロである。

ゼロやウルティメイトフォースゼロの仲間達は各地に散らばりパトロールをしていた。

（それにしても……親父やウルトラマン、ゾフィー隊長達が言つてた不穏な空氣つて一体……）

ビートスターとの戦いが終わった直後、自分の宇宙を守る宇宙警備隊と呼ばれる組織の隊長であるゾフィー、セブンにその父の同期であるウルトラマンに宇宙で不穏な空氣が流れていると言われ氣に掛けていた、その事がありパトロールを徹底的に行つているのだ。

「親父達の思い過ごしならいいんだけどな…………」

仲間達と合流しようと旋回しようとしたその時だった。

「つー」

刹那、光弾が無数襲い掛かってきたがそれを右に傾き飛行しながらそれを避ける。

「なんだ！？」

立つように静止し放たれた方向を向き皿に入つたのは数機の両手に巨大な青い銃身が伸びる一足歩行のロボットだった。

「レギオノイドー！」

それはベリアル軍が大量生産し兵器として使つたいた帝国機兵レギオノイドだった、なおこのタイプは宇宙戦型の である。

このレギオノイド達はベリアル軍の残党であり今もなお破壊活動を続いている。

「だいたい20機か…………まあいい、相手してやるぜ!」

頭部に装着された一本のブーメラン、ゼロスラッガーに手を掛け、それを握って外しナイフのように持つ。

レギオノイドは銃口をゼロに向け一斉に光弾を発射、爆発したため直撃したかのように思われたが爆炎の中からゼロが飛び出してきて緑色の光が走りレギオノイド二機はゼロスラッガーにより胴体を切り裂かれ爆発し炎に呑み込まれた。

「ふう〜、やつぱりレギオノイドはレギオノイドだな」

ゼロスラッガーを戻し左腕を水平に伸ばしてから右腕を曲げ胸に近付け左腕を引いて額のランプ、ビームランプから緑色の細い光線、エメリウムスラッシュユを放ちレギオノイドの頭部に直撃し機能を停止させた。

「ふつ!/? デリヤツ!」

背後から光弾が迫ってきたため真上に飛び立ち、流れ弾は機能が停止したレギオノイドに直撃し爆散。

「おひああああああつ!…………」

斜めに急降下し左足を引いて右足に炎が纏わせ放つ飛び蹴り、ウルトラゼロキックを炸裂、レギオノイドを頭部から貫き撃破する今度は右手に炎が纏いその状態で放つチョップ、ビッグバンゼロでもう一機破壊。

「これで……終わりだ！」

エメリウムスラッシュを放ったように左腕を水平に伸ばし腕を二字に組むと右腕が光り輝き。

「デリヤアアアアアアツ！…………！」

金色の広範囲に広がる光線、ワイドゼロショットで残りのレギオノイドを一掃しようと放つ、次々と爆発していくが全滅はしなかつた、何機か後ろに隠れ盾にしていたからだ。

「まさか盾に…………」

もう一度ワイドゼロショットを放とつと腕を組むがどこからか竜巻のような光線が放たれ残ったレギオノイドを呑み込み消滅した。

「今のは『イメンジョントーム！？』

ゼロはその光線の名を知っていた、放たれた方向を向くとそこにはゼロに姿は似ているが赤く輝く繋がつた一つ眼に青は橙色、赤は黒く、胸は太い砲門が出ていたが収納され肩まで上がつていたプロテクターは下がりクリスタル、カラータイマーで完全に閉じられ、カラータイマーとビームランプは白くなつた巨人だった。

「ダークロープス…………いや、貴様はダークロープスゼロ！」

ダークロープスとはベリアル軍がゼロに似せて作ったロボットだが今この場にいるのはゼロの宇宙に流れ着き侵略星人サロメ星人が工

ネルギー変換装置「**ティメンジヨンシステム**」、時空移動装置「**ティメンジヨンコア**」が内蔵された「**ダークロップスゼロ**」だった。

先ほどの竜巻は「**ティメンジヨンコア**」から放った相手を別次元に飛ばす「**ティメンジヨンストーム**」だった。

だが「**ダークロップスゼロ**」はゼロが倒したはずなのだが……

「まさかサロメ星人がまた「**ダークロップス**」を……」

「**ダークロップス**」が何らかの影響で自分の宇宙に流れ着きサロメ星人が回収したのかと考えたのだが。

「俺は貴様を覚えている、ウルトラマンゼロ」

その言葉に先の考えを捨てた。

「なぜ貴様が！」

「教える必要はない」

「**ダークロップスゼロ**」の眼は輝くとその場から消え去った。

「消えた……だと」

セブン達が警告していた不穏な空気とはこの事なのだろうかと考えを持ち始めていた。

「不穏な空気……上等だ、そんな空気の流れ、変えてやるぜ」

そう呟いた瞬間、助けて、その一言が聞こえてきた。

「誰だ……」

助けて、その一言は弱々しく、だが力強いものだった、心から助けを求めているような。

「ゼロー。」

そこにウルティメイトフォースゼロの仲間である暗い赤と白、横半分に分けたような配色に黄色い眼に胸部に三対に並んだ発光部に腹部に菱形に赤く輝く発光部が付いたジャンナインがやつてきた、近くを通りかかり話し掛けたのだ。

「どうしたんだゼロー？」

「声が……」

ジャンナインは自分に備えられた機器を使いゼロが聞いた声を聞き取りうつとするができないのだが。

「機器には何も反応がないのに声が……！」

その言葉の通り、だがジャンナインは確かに聞いた、その助けを求める声を。

「これは……別の宇宙から助けを求める声かもしねー……」  
「イツも感じてるみたいだ」

ウルティメイトブレスレットのクリスタルは強く発光していた。

「ジャンナイン、アイツらに俺は別の宇宙に行くって伝えておいてくれ、俺はコイツを頼りに助けに行く、その声をな」

ゼロが身構えるとジャンナインは彼の肩に手を乗せ。

「ジャンボット達には今さつき伝えた、だから俺も行く」

その際に色々訳を聞かれたと思ったが今は助けを求める声が気に掛かっていた。

「何が起きるか分からねーぞ?」

「百も承知だ、だがお前を信頼している、仲間だからな」

仲間、その言葉を聞き鼻で笑うと。

「じゃあ行こうぜー デアツー!」

ウルティメイトブレスレットが消えると代わりにゼロを白銀の羽根のようにも見え胸の部分に菱形の青いクリスタルが埋め込まれ背にクリスタルが埋め込まれた二つの突起物が付いた鎧が装着し、右腕に二つの青いクリスタルが埋め込まれた白銀の剣ウルティメイトゼロソード、それらを合わせウルティメイトジークスと呼ばれる神秘の鎧を身に纏つたウルティメイトゼロとなる。

「じゃあ、行くぜジャンナイン!」

その言葉に頷くゼロは白い光りを放ちジャンナインを包むとその場から一瞬にして消えた。

そしてゼロとジャンナインは我々の地球に訪れたウルトラマン達が入隊した防衛チームはあるがウルトラマンは架空の存在、怪獣は現実の存在、そして地球上に存在する別空間がある宇宙に誘われるのだった……

TO THE NEXT STAGE

## STAGE 01 プロローグ（後書き）

ジャンナインが生意氣でお気に入りです、ボスが乗ったのにはビックリしましたね。

東方キャラに乗せるのもいいなと考えています、他のウルトラマンも出るかと思います、特にゾフィーとメビウスが。

外の世界設定は防衛チームと怪獣がいてもウルトラマンは空想の存在という世界観です。

理由は主に武器とかです。

次回予告

魔理沙

「またロボットが現れたみたいだぜ」

靈夢

「早苗が喜びそうね」

文

「清く正しい射命丸でーす

ゼロ

「この宇宙か……」

紫

「来たわね」

アーストロン

「ギャオオウ！」

靈夢

「光の…………巨人…………」

次回『STAGE 02 幻想郷』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8041z/>

---

東方零物語

2011年12月25日19時47分発行